

シュッツのレリヴァンス概念の看護研究上の活用方法論 —グランデッド・セオリー・アプローチ（GTA）との対比から—

山中 恵利子ⁱ

看護師から聴取した看護体験談の分析にあたり、シュッツのレリヴァンス概念を用いた研究手法の特徴を、看護研究で最も頻繁に使われるグランデッド・セオリー・アプローチ（GTA）と対比させることによって、レリヴァンス概念を用いた研究手法が看護体験談の分析にもつ意義を検討することが研究目的である。まず、①レリヴァンス概念を用いた研究手法におけるデータの取り扱い方、②グランデッド・セオリー・アプローチ（GTA）のデータの取り扱い方の対比を行った。結果として前者①は、データから当事者の内部地平にある「主観的な意味の世界」（主題・動機・解釈など）を探り、当事者の理解に着目するが、後者②は、データを当事者の外部地平（客観的な意味の世界）である外在的データ（出来事）として取り扱い、当事者を客観的に説明することに着目するという裏・表の関係であった。GTAの研究結果にわかりやすく納得のいく了解、明証性を得るには、レリヴァンス概念を用いてのデータ分析の導入を必要とする主張する。そして看護体験談の分析には、GTAでは困難な「主観的な意味の世界」を探り、当事者の理解に着目するという独自の意義をもつレリヴァンス概念を用いた研究手法が、有用であると結論づける。

キーワード：レリヴァンス概念、グランデッド・セオリー・アプローチ、シュッツの言語理論、内部地平・外部地平

目次

- I. グランデッド・セオリー・アプローチとレリヴァンス概念を用いての其々の研究概要と分析方法
 - 1. グランデッド・セオリー・アプローチの研究概要と分析方法
 - 2. レリヴァンス概念を用いて分析する研究概要と分析方法
 - (1) シュッツの言語理論について
 - (2) レリヴァンス概念について
 - (3) レリヴァンス概念を用いて看護体験談を分析する
- II. 社会科学におけるデータの取り扱いについて
 - 1. データの外部地平と内部地平、説明と理解

2. 文献の紹介と再解釈

- (1) 文献の紹介と再解釈 1
- (2) 文献の紹介と再解釈 2

III. 考察

はじめに

看護師の心に残っている体験、例えば多忙な看護業務を行うなかで手が届かなかった援助や、気になる患者の接し方など、一度振り返って整理しなければならない看護体験を看護師の方々に語ってもらい、「その語り」のなかから看護の知を引きだし、看護の質を高めていく研究は重要と思われる（山中2011:1-8, 2012:1-7）。

i 立命館大学大学院社会学研究科博士後期課程

過去の気になる看護体験を思い出すことは、その体験を「今」にひき戻し、新たな光を当てることである。看護師は、思い出しながら、語りながら、その体験に新たな意味づけをおこなうのである。言い換えれば、〈看護師の主観的な意味世界の再構成をおこない、そこに隠されている看護の知を見出す〉研究である。

筆者は、研究目的を導きだす道具立てとしてアルフレッド・シュッツのレリヴァンス概念を用いるが、レリヴァンス概念が研究目的に応じた手法であるのかについて検討することが本論文の目的である。特にレリヴァンス概念を用いた研究手法の特徴を、他の看護研究に見られる質的研究の手法と対比することによって、明らかにすることを試みる。看護研究においては質的研究の研究手法としてグランデッド・セオリー・アプローチ (GTA) が最も頻繁に用いられている (三木 2010:42-51, 山口 2013:62-69)。本論文において、GTAとレリヴァンス概念を用いた研究手法との対比を試みる。

1. GTA とレリヴァンス概念を用いての其々の研究概要と分析方法

最初に二つの研究手法を比較する前提として、其々の研究方法の概要及び分析方法を述べる。まず比較対象とした GTA の研究概要・分析方法、次にレリヴァンス概念を用いて研究する研究概要と分析方法を記述する。

1. GTA の研究概要と分析方法

GTA は、1960年代に Glaser と Strauss によってはじめて用いられた、データから理論を築き上げることを目的とする1つの方法論である。その理論とは、社会現象や心理現象の理解を深める解釈理論である (チェニッツ・スワンソン編 1992:3)。

研究手法としては、収集されたデータを切片化・分節化してデータを合理化し、そこから一義的な概念を引出し発展させる。それは、データから引き出

したいいくつかの似通った概念を比較対照して、同じ特徴をもつ概念をひとまとめにして最初のラベルづけをおこない、カテゴリーを作成するという展開の仕方である。さらにデータを収集して分析を進め、別のカテゴリーを作り出す。そしてカテゴリー同士の間連パターンを知ることで最初の仮説が立てられ、フィールドワーク等によって検証され、理論の基礎づけが成されるのである (チェニッツ・スワンソン編 1992:8-9)。GTAの手法は形式的にみれば一種の帰納法的経験研究であるといえる。

GTAには、オリジナル版 (1960年にグレイザーとストラウスによって考案された質的研究法)、ストラウス・コービン版、グレイザー版、そして M-GTA という4つのタイプがある (グレイザー・ストラウス 2000, コービン・ストラウス 2012, 木下 2009)。そのうち本稿では、データの内容分析についての議論がわかりやすい、ストラウス・コービン版のコービン (Corbin) の議論、及び「データの切片化」という従来の分析方法を改良した M-GTA の報告を紹介する。

コービンは、「表面的な記述から理論的解釈まで幅がある。表面的な記述は、データのうわべだけに目を通し、思考の精査にはなっていないし、新しい理解を提示することもない。深い詳細な分析は、よく構築されたテーマ、理論的カテゴリー、文脈の展開、プロセスや変化の経時的な説明を包含している記述を提供する。」(コービン・ストラウス 2012:69) という。そして、分析のための道具として大きく2つを上げている。1つには「問いを発する」、2つには「比較をおこなう」である。「問いを発する」「比較を行う」についてその概要を以下に引用する。

「問いを発する」ことによって研究者は以下のことが可能となる。

- 徹底的に調査すること
- 暫定的な答えを引き出すこと
- データについて熟知すること

このような問いを発することによってある程度可能性のある回答を考える事は、他者の役割をとることが可能となり、それによって研究協力者のパースペクティブからその問題をより深く理解することも可能となる。問いに対するいかなる回答も暫定的なものであるが、それでもその回答は、この研究協力者から、同様に将来の研究協力者から、データの中で何を探す必要があるのかについて考えさせ始めさせてくれる。

「比較を行う」ことによって研究者は以下のことが可能となる。

- ・他の方法ではほんやりとしか見ることができない出来事の意味を分析者にはっきりつかみ取らせる。
- ・展開しつつある理論分析に基づいてさらなるインタヴューのための質問や観察への提言をする。
- ・分析者をより早く記述レベルから抽象レベルへと移動させる

比較分析は、社会科学研究領域の主要な特徴の1つである。データを分類する際に、比較によって1つのカテゴリーが他のカテゴリーから区別され、カテゴリー特有の構成要素（プロパティ）とそのバリエーション（ディメンション）を明らかにすることが出来る。また理論的比較をおこなうということは、共通してみられるプロパティと、異なるプロパティについてより抽象的に考えるという段階へと研究者を押し進める機能がある。（コービン・ストラウス 2012:97-109）

以上が「問いを発する」「比較を行う」という分析のための道具を緻密に使って、データから理論を築きあげる過程である。そしてデータをどのように分析するのかという分析をする態度としてコービンは、以下のように主張する。

研究者が自分の信念やパースペクティブを「括弧」に入れて分析をすることは不可能だと考える。「私たちは自分の先入観や思い込みを認め、意識的にその経験を分析のプロセスを促進するために活用

することがより有効であると考えている」という（コービン・ストラウス 2012:121-22）。

要するにコービンは、現象学を基盤にする質的研究者が用いる現象学的還元¹⁾では、データの意味を把握することは不可能だと考えている。そして上記に示した2つの方法を用いることによってデータの意味を把握することが出来ると主張する。

次にM-GTAのデータの分析手法について以下概略する。

M-GTAはデータのコード化を行う時点から他のタイプとは異なる。M-GTAは、データの中から研究者が注目したデータを分析して概念を生成する。注目したデータは他のデータを代表としたものに限られ、分析する場合には分析焦点者という実在の誰それではない分析上の視点を設ける（木下 2009:118）。分析焦点者を設定する理由は、研究テーマを決めたと同時に分析テーマの決定をおこない、分析テーマと分析焦点者の視点からデータをみるのである。データから概念を生成する場合、1対1の関係ではなく1対10の対応となる必要性があり、いわゆる他の具体例も説明出来るような概念を考える。換言すれば、1つの概念が1つの具体例を説明するのではなく、1つの概念が10の具体例を説明できるような概念を考えるということである。そのため理念型 Ideal Type としての分析焦点者を設定するわけである（木下 2009:176）。このような段階を踏んで、さらに他のデータと比較しながら抽象度を高めていく分析手法である。そして分析されたデータの意味については、研究者が「何よりも自分がリアリティを感じられるかどうかのポイントになるわけで、そのためには自分の問題関心をできるだけはっきりと確認しておくことが不可欠である」とする（木下 2009:36）。研究者が関心を抱いている問題の方向に、または研究者が抱いている分析テーマに沿うような意味の解釈が求められるのである。

データ分析の大枠について、「事例研究のように個人を単位としてデータを分析するのではなく、複

数である研究協力者すべてのデータは一体のものとして、(個々の違いは触れずに) 分析する」と結論づけている(木下 2009:81)。

上述したように、看護研究ではGTAが多様に行われてきたが、GTAには以下のような批判がある。GTAに対する批判としてまずデータのコード化作業である「データの切片化」が挙げられる。「データの切片化」は、インタビューされる人を尊重して彼らの物語を描写するには不十分であり、研究協力者のライフ・ストーリーに見出せる意味について目をつぶっている(梁 2007:30)。研究者の立ち位置として、客観主義的立場が研究者自身に対する再帰性を困難にしている(山本 2007:169)。つまり研究者が研究協力者の「語り」を一旦自分に引き戻して、その「語り」から見出せる意味を問うことを困難にしているということである。「データの切片化」に対する批判に通じる内容と考える。2点目として、GTAが目指すデータから理論を築き上げるその方向性についての批判である。GTAの「一般理論」(たとえそれが「領域限定理論」であったとしても)を志向する性格が、当事者のもつ多元的なリアリティを切り詰め、言語活動における日常的な意味づけを無視しがちだと思われる(山本 2007:169)。

GTAに対する批判は、研究協力者が発する言語の取り扱い方に焦点化されている。データのコード化作業である「データの切片化」という表現が象徴しているように、研究協力者が発する言語に対して、調査者はどのように受け止めるのかという2者間の間主観性に対する配慮がなされていないのである。我=汝という、普段の会話に見られる、お互いの立場に立ちながら会話をするという視界の相互性を抜きにしている点である。そして研究協力者が意味づけのままの語りを「データとして切片化」という手法に対しての批判もある。これらの点を筆者の研究目的に照らしてみると、研究協力者と調査者という2者間の、眼に見えない間主観性について、言語がどのような役割を担っているのかを知らなければ研究協力者の主観的な意味世界の再構成は不可能

である。また看護体験談を「データとして切片化」するだけでは、主観的な意味世界の再構成は不可能である。以上の議論からGTAに対する批判は、研究協力者と研究者という2者間の間主観性に対する配慮がなされていないという点で重要なものであるとしても、研究協力者が発する言語の取り扱い方にのみ焦点化される。研究協力者が発する言語が担っている役割についての研究者の認識に、問題があるということである。このような背景からGTAは、データに隠されている当事者の主観的な意味の世界である〈内部地平〉²⁾を模索するのではない。一貫して研究協力者のデータを当事者の〈外部地平〉にあたる、いわゆる外在化されたデータとして捉えるのである。しかしながら、当事者の〈内部地平〉を模索するには、まず当事者の〈外部地平〉を整えなければならないという点においてGTAの有用性は認められる。

まとめてみると、GTA、M-GTAは共にデータに隠されている当事者の主観的な意味の世界である〈内部地平〉²⁾を模索するのではなく、研究協力者のデータを当事者の〈外部地平〉にあたる、いわゆる外在化されたデータとして捉える。

研究テーマに沿って、選択された出来事を調査して質的データを収集する。そして原因・結果を明らかにしながら、その出来事を言葉に置き換えるための概念化をおこなう。さらに研究テーマに沿った概念を拾い出し、中心的概念の決定、構造化をおこない理論形成へと向かう。このようにその出来事、現象のプロセスを帰納的に説明するという研究手法を採用しているといえる。

2. レリヴァンス概念を用いて分析する研究概要と分析方法

上述したようなGTAの持つ問題点を乗り越えていると思われるのがシュッツが提唱したレリヴァンス概念を用いての研究手法である。レリヴァンス概念を用いての研究手法が、GTAの上記の問題点をどのように乗り越えて、当事者の主観的な意味世界の

再構成をおこない、そこに隠されている看護の知を見出すことができるのか、この点について以下に論述してみたい。

シュッツの「レリヴァンス」概念を理解するためには、まずシュッツの言語理論を理解することが重要である。そのためにシュッツの言語理論を紹介して、その後レリヴァンス概念の説明をおこなう（シュッツ 2006:197-212）。

（1）シュッツの言語理論について

人々が語る、その言語を研究対象とした場合、私たちは必然的に「言語とはなにか」という命題に取り組まざるを得ないだろう。この問いについては、私たちの日常生活のなかに大きなヒントが隠されている。何故ならば、日常的に私たちは言語を使用しているのである。最も解りやすい例として、若い時に誰もが体験する‘失恋’を想起してみる。‘失恋’という辛く、歯がゆい、寂しい感情を全て言葉で言い表すことが可能であったか。それは「否」である。それでは、恋愛が成就して結婚することになったという至福の体験を、全て言葉で言い表すことが出来たであろうか。それも「否」である。私の体験を全て言い表すことの出来ない言語とは人間にとってどのような存在なのだろうか？このような視点をさらに深く考えてみたい。

言語は私の主観的な体験すべてを言い表すことは出来ないが、しかし、他者に伝える道具という独自の役割を担っているといえる。「間主観性」³⁾という私と他者の間をとりもつ意思疎通の道具の役割である。私の思い（主観的な体験）を伝える方法として、「語る私」「書く私」の場合、すべて言語が用いられることは周知の事実である。しかし、面対面の場合には「私の表情」「私の雰囲気」「手振り」等が、言語以上に強く他者に私の思い（主観的な体験）を伝えることが可能である。問題は言語によって「私が今体験していること」をすべて他者に伝えることが出来ないということである（佐藤 2008:3）。次に会話の場面を思い起こそう。

今、私があなた（会話する相手をあなたと書くこ

とにする）になんらかの事を話そうとすること、それは今、体験していることを話すということである。私が自分の体験に目を向けようとすることは、反省するという態度である。言い換えれば、既に経過してしまった体験にまなざしを向けるということである。しかし、〈話をしているあなたの体験〉について私はその経過を眺めることが出来る。逆にいえば、あなたは〈話をしている私の体験〉のその経過を眺めることが出来る。「話をしているあなたの体験」のその経過を眺めながら、私はあなたが意味づけしたその「語り」を私は「あなたの表情」「あなたの雰囲気」「手振り」等にも注意を払って意味解釈しながら理解しようとするだろう。そして「話をしている私の体験」をあなたは、同じく「私の表情」「私の雰囲気」「手振り」等にも注意を払って意味解釈をして理解しようとしているだろう。意味づけ（意味措定）と意味解釈が常にグルグル回りながら、時には比較的正確に、また時には誤解、勘違いを引き起こしながら、私とあなたの会話は続いていく（佐藤 2008:8）。私もあなたも単純にお互いが発する言葉を言葉どおりに聴いているというのではなく、聴きながら頭のどこかでお互いの言葉を解釈している、このような態度こそ、日常生活世界での私たちの会話である。

このように考えると言語によって、私の体験のすべてをあなたに伝えることは出来ないが、あなたは私の言葉をただ単純に聴いているだけではなく、その意味を解釈している。私の体験の近似値に居合せているのかもしれない。しかし、この逆もいえる。私はあなたの体験を眺めやり、あなたは私の体験を眺めやる。私はあなたが全く注目していない体験にも、目を向けることができるのである。このような事態をシュッツは「あなたと私は特殊な意味で同時的であり、両者は共存する、私の持続（ベルクソンは意識を持続という）とあなたの持続が交差する」という。このことは、言語が私とあなたの間主観性の役割を担っているということ、言語が私とあなたの交点において発生するということを言い表してい

る。私とあなたの交点において言語は発生するが、同じくその交点において、それぞれの立場を置き換え視座の相互転換をはかりながら「このような状況では、ひとはどのように反応するであろうか」という「言語の客観的意味連関」の表現図式を媒介にして「意味措定」と「意味解釈」が交互に続行する。

私達が通常行っている会話の真の姿をこのように言い換えることが出来る。そしてこのような作業を通して、お互いの理解が深まっていくと言える。人々の語りを研究素材とする場合、人々が発する言葉のみにとらわれたならば、言語による分析という言語のシンボルを利用しておこなうため、論点先取りという過ちに陥るのである(佐藤 2008:9)。このことは、言いかえれば言語によって示される意味内容が、発話している人間の言わんとしている全てを言い表しているのだと判断することは誤りなのだということである。

会話の交点において視座の相互転換をはかりながら「このような状況では、ひとはどのように反応するであろうか」と私たちは思案する。例えば、このような言い方をすれば、相手は理解してくれるだろう、このような態度をとれば相手に良い印象を与え、相手はこのような反応を示してくれるだろうという、先を見越しての視座の相互転換である。このことを良くあらわしているのが〈動機〉ということばである。私があなたに何かを答えて欲しいという問いかけをする場合、その動機には将来への目標や目的が含まれている。シュッツはこの動機を目的動機(シュッツ:1996 81-9)とした。また問いかけられたあなたは、私の目的動機が理由となって答えなければならないという動機を抱く。その動機をシュッツは理由動機という。問いかける私は、私の目的動機があなたの理由動機になることを暗黙に了解している。反対に私に向けられたあなたの理由動機が、あなたの目的動機であるという眼差しを向けることも出来る。目的動機・理由動機という有意味的関連は、会話の場面のみならず日常生活で営まれている行為場面においても見られるのである。次にシュッツの

レリヴァンス概念について述べるが、上述した日常会話のなかにみられる動機的レリヴァンスである目的動機、理由動機が重要な位置を占めている。

(2) レリヴァンス概念について

レリヴァンス(relevance)とは、和訳にすると関連とか関心と訳される。現象学の用語でいえば、志向性と同義であり、今、何に関心を抱いているのか—レリヴァンスは何なのか、または意識は今何に向かっているのか—レリヴァンスはどこに向いているのかというニュアンスでレリヴァンスを使うことができる。このレリヴァンス概念とは、誰もが持っている、意識の中層の内容を、主題・解釈・動機という三つの軸によって把握する概念である。現象学の時間概念は、大きく分けて三つの層に振り分けられる。それぞれを①表層の時間(客観的時間—通常の生活時間)②中層の時間(先経験的時間)③深層の時間(先時間)の三つの時間意識である⁴⁾。②の中層の時間はいわば私達が気づきにくい領域であるが、シュッツはその内容を把握する概念としてレリヴァンス概念を見出したのである(シュッツ:2006:246-50)。レリヴァンス概念の背景にはシュッツの行為理論が存在している。行為は、あらかじめ企図された行動の計画に従った行動のことである。それは、未来において完了していると時間意識のなかで考えられて決定された行動である。しかし、その行為が完了してしまうと、行為をする前の企図に付与されていた意味づけは、行為が終了すると変様を受ける。そのうえ完了した行為が、過去の出来事になると無数の反省を許してしまう。反省を行うというような、ある行為が当の行為者によって解釈されるもっとも単純な意味連関が、その行為の動機である。

レリヴァンス概念のユニークな点は、上述した2つの異なった動機、行為者の抱く「目的動機」と「理由動機」を提示したことである。前者は未来を指して、ある目的の実現のための手段であるような目標とか目的「…のための」動機である。後者は過去を指して、行為者によって普通「…だか

ら」と呼ばれる「そのわけ」、行為を行った理由にかかわる動機のことである。そういうわけで行為は、目的の動機を含む企図や計画によって規定される。目的の動機は企図される行為によって実現される未来の事態であり、また企図それ自体は理由の動機によって規定される。目的の動機は行為それ自体の統合的な部分であるのに対して、理由の動機の方は完了時制における特殊な反省作用を必要とする。以下において「シュッツ パーソンズ往復書簡 社会理論の構成」からシュッツの『社会的行為の構造』の研究を引用する。

目的の動機の連鎖も理由の動機の連鎖もどちらも、ある具体的な行為を含む行為者によってでまかせに取捨選択されうものではないということである。逆に、それらは大きな主観的体系のなかで秩序立てられている。目的の諸動機は、生活設計とか仕事と余暇の計画、『次になすべき事柄』の計画、今日の時間表、時間の必要などといった計画の主観的体系のなかで統合されている。理由の動機の方は、『社会的パーソナリティ』という項目でアメリカの文献のなかでそれ相当に扱われている諸体系のうちに分類されるものである。自我そのものの基本的態度を形づくっている過去における行為者の多様な諸体験は、たとえば原理、格率、そして習慣といった形式ばかりでなく趣好や情緒などの形式のうちに凝縮されているのであるが、これこそその行為者によって人格化されうこのような〔社会的パーソナリティの〕体系を築きあげるための要素である（スブロンデル編 1980:106-107）。

続けてシュッツは、行為の意味づけについて述べる。

以上のことから行為の意味づけは、行為する前、遂行している時、終了後には変様するが、動機は変様にくいといえる。そして動機理論の利点とは何であるか。まず第1に指摘できることは、上記で概

略した動機の理論が厳密に主観的な見地に限定され、どのような客観的要素も含んでいないということである。つまり、全くの主観的事実がこの見地から主観的用語で完全に記述できるということである。そのうえさらに、これらの主観的用語は類型化できるし、解釈の図式として社会的世界のなかの行為者のパートナーおよび科学的観察者自身のどちらによっても使用することができるのである（スブロンデル編 1980:107）。

そして類似な行為について以下引用する。

人間の活動はその目的の動機もしくは理由の動機を表示することによってもっぱら理解可能となる。より具体的に言い換えると「私がほかの人の行為を理解することができるのは、自分がほかの人と同一の状況のなかに置かれ、同一の理由の動機によって導かれるとか、同一の目的の動機によって方向づけられるとすれば、私自身も類似な行為を行うだろうと想像出来る」のである（スブロンデル編 1980:135）。

上記の内容に沿って、看護体験談の分析について考えてみる。失敗した看護体験談の場合、当事者は反省しながらその状況に持ちこまれた目的動機・理由動機ではなく、成功に導く目的動機や理由動機を提案するのである。そして〈このような状況のなかに置かれた場合、このような目的動機、このような理由動機によって方向づけられたならば、このような効果的な看護をおこなうことが出来る〉という類型化（看護の知）を得ることが出来るのである。このような考え方は、質的研究における科学性や一般化可能性への懐疑に対して、新しい知見を与えるものであると考える。

次にレリヴァンス概念の三つの軸となる主題的レリヴァンス、解釈的レリヴァンス、動機的レリヴァンスについて述べる（シュッツ 1996:60-89）。

私たちは日常「見慣れた」状況を「なんでもない」

当たり前の状況だと思い、それを当然のこととして疑うことをしない。しかしその状況に「予想もしない問題」が突然立ち現れると、その見慣れた状況は一変して「問題に関わる側面」と「問題に関わらない側面」とに区分けされて現出する。シュッツはこの突然の意識の変化を「レリヴァンス」―意識の選択的志向作用または選択された対象に意識を向ける作用―によって生み出されると考える。「問題に関わる側面」これが〈主題のレリヴァンス〉である。一旦、ある問題（主題）が意識に立ち現れると、今度はこの問題を理解しようと今までの経験や知識を総動員して解釈する。これが〈解釈のレリヴァンス〉である。最終的には私達は、主題（問題）の解決にとって有効な結果を予想させる選択肢を選ぶという判断を行うことになる。判断を行う方向付け、いわゆる「動機」をレリヴァンスによって選択するのである。この「動機」には、未来の企図によって行為を方向づける目的動機と、この動機を支える過去の諸体験から導かれる理由動機という2つのタイプの動機が区別される。（動機連関については先述している）このように三つの軸で分析された内容は、人々の意識の中層を表すことであり、平たく言えば当事者の〈主観的な意味の世界〉である。そのため当事者の〈主観的な意味の世界〉とは、当事者も観察者も気づきにくい領域と言える。

(3) レリヴァンス概念を用いて看護体験談を分析する

これまで筆者は看護師7人の方から貴重な看護体験談を聴取して、レリヴァンス概念を用いての分析を行なった（山中 2011, 2012）。その経験からどのような手順で分析を行なったのか、以下に記述する。

看護師によって語られた看護体験談をレリヴァンス概念を用いて分析する際、まず丁寧にかつ正確に文脈をみていく。そして時間的、空間的にいくつかの場面に区分けする。語りの内容によってその区分けを行わない場合もある。次に場面に応じて、意味づけられた語りを追体験しながら意味解釈をして、その時その時のレリヴァンスを探していく。何が主

題（主題的レリヴァンス）となっているのか、その主題についてどのように解釈（解釈的レリヴァンス）し、どのように解決しようとしているのかをみていく。解決しようとする時に動機（動機的レリヴァンス）が現れるのであるが、このように三つの柱となるレリヴァンスを見出した時、当事者である看護師の立ち位置が明確となる。このレリヴァンスは、フッサールがいうところの意識の志向性と同義である。当事者も気づいていない意識の中層に存在するレリヴァンスを見出して、語りに隠されていた動機連関を用いて類型化、看護の知を引き出す。

Ⅱ. 社会科学におけるデータの取り扱いについて ―「説明」と「理解」

1. データの外部地平と内部地平、説明と理解

GTAにおける結論の内容は、データの外部地平を分析して出来事の因果論とそのプロセスを説明することだと考える。反対にレリヴァンス概念を用いて分析する研究スタイルは、データの内部地平を探り、当事者の〈主観的な意味の世界〉という「当事者が思ったり、感じたりしている意味の世界」であるが、当事者も観察者も気づきにくい領域を明らかにすることである。このように前者は、データを当事者から離れた外在に置き、後者はデータの内部地平を探るという、対照的なデータの取り扱い方である。

次に社会科学のデータの取り扱いについて、特に理解社会学のマックス・ウェーバー、現象学社会学のアルフレッド・シュッツがデータをどのように位置づけているのかについて以下に記述する。

「社会学とは社会的行為（の意味）を解明しつつ理解し、そうすることによって社会的行為の経過や結果を因果的に説明しようとするひとつの学問である、といっておこう（ウェーバー 2005:85）。」この引用は、マックス・ウェーバーの「社会学の基礎概念」の一番基本的な用語の一つである。この引用にみる「理解」の用語は、「説明」と共にマックス・ウェーバーの「社会学理論」の基本的特徴を言いあら

わしている。ウェーバーがこのような考えに至ったわけは、人間の行為の研究は、その出来事が起こった因果関係について外面的に説明できたからといって、満足は出来ない。何故そのような出来事（行為）を行為者が行ったのか、その動機が理解できてはじめて人びとはその出来事を納得できるのである。例えば『アンネの日記』の本の一部を大量にハサミで切り刻んだ事件で最近ようやく犯人が判明したようであるが、犯行の因果関係が説明できても、なぜ犯人がそのような犯行におよんだのか、その動機や理由がわからなければ、誰も事件について納得がいかないであろう。この点を克服する方法としてマックス・ウェーバーは「出来事に参加した個々人の行為の動機」の理解に着目したのである。

アルフレッド・シュッツは「社会科学のデータは日常生活を営んでいる普通のすでに常に予め構成されてしまっている。言い換えれば人間のデータのもとに横たわっている客観性を追求する社会学者が願ひ下げできない性質のものである。」としている。そして「科学は常に客観的意味連関であり、社会的世界のすべての科学の主題は、一般に主観的意味連関ないし特殊な主観的意味連関の客観的意味連関を構成することにある（シュッツ 2006:335）」という。

上記のマックス・ウェーバーやアルフレッド・シュッツの言わんとすることは、社会科学においては、出来事としての人々の行為を理解するには、因果法則などによるその行為の説明だけではなく、同時に当の行為者がその行為に付与している動機などの主観的意味的領域にまで踏み込んで説明することによって、初めてその社会的行為の明証性が担保出来る、つまり理解出来るということである。このような視点でグランデッド・セオリーの社会的行為の分析手法を見ていくと、社会的行為を観察者の客観的見地に基づいて説明するという分析手法であり、当事者のデータからその「主観的意味領域」へと通じる手法を選んではない。曖昧のまま放置されている。グランデッド・セオリーの研究結果に明証性を与えるためには、データの外部地平にとどまらずに、

「自然的態度のうちに生活する日常人」シュッツが自明視している「常識の知」を介して行為者の内部地平を模索して主観的意味領域へ移行することが必要である。

以下に GTA を用いて研究をおこなった研究論文から、其々ひとつのデータを選んで当事者の「主観的意味の世界」についてレリヴァンス概念を用いて明らかにする。そして、論文の結論を補完して明証性を付与しているのかについて検討する。

2. 文献の紹介と再解釈

(1) 文献の紹介と再解釈 1

最初に検討するのは、「ターミナルにかかわる看護師の“肯定的な気づき”がその後の態度を変容することが出来た」という研究結果からどのような“肯定的な気づき”であったのかについて明らかにし、結論の補完をおこなった事例である。

文献は大西奈保子氏の「ターミナルケアに携わる看護師の“肯定的な気づき”と態度変容過程」である（大西 2009:34-42）。

「ターミナルケアに携わる看護師の『肯定的な気づき』と態度変容過程を明らかにする。」ことを研究目的として、ターミナルケアに関心のある看護師を上司や同僚から推薦してもらい研究の依頼をおこなった。その結果、面接に協力してくれた看護師は、関東近郊の公立や民間の一般病棟で働く看護師26名と訪問看護ステーション勤務者4名、計30名であった。以下の研究結果が得られた。

得られたデータを分析した結果、ターミナルケアに携わる看護師の態度には、患者から死にまつわる言葉や態度が示されると心理的・行為的に患者にできるだけ近づかないようにする態度と、患者からそのような態度が示されても逃げずにかかわろうとする態度に大別され、前者を《死から逃げる態度》後者を《死から逃げない態度》とした。そして今回《死から逃げる態度》から《死から逃げない態度》への変化に注目し、その変化を引き起こす要因が看護

師の《肯定的な気づき》であった。さらに《肯定的な気づき》を促す要因が《臨床での経験》,《教育的な働きかけの享受経験》,《ライフヒストリーの経験》であることが明らかとなった(大西 2009:37)。

論文の構成としては、看護師の《死から逃げる態度》,《死から逃げない態度》の其々を紹介している。この論文から、比較的内容が理解しやすい事例、看護師4と命名された看護師の語りを選択した。以下に引用する。

看護師は、「(新人の頃は)ターミナルの患者という」と悲惨なイメージだった」というような《死から逃げる態度》であったが、経験10年になると以下の発言にみられるように《死から逃げない態度》へと変化した。

「自分が亡くなるってということがわかっている患者さんたちっているじゃない?もう死ぬような気がするんだよねとか、言葉に出してくる人もいないじゃない?だけど、その時に私が気をつけているっていうか、心がけているのは、そういうのをあんまり否定したりだとか、逃げないほうがいいにいいいうふうには私は思っているのね(大西 2009:38)」

看護師が、自分の患者への態度について意味づけながら話した上記のデータは、シュッツがいうように看護師によってすでに解釈されての発言である。この発言を筆者が意味解釈をして看護師のレリヴァンスを探り、主観的な意味の世界の記述を試み、看護師の《肯定的な気づき》の内実を明らかにする。二重括弧内に意味解釈を示す。

『自分はもうすぐ死ぬような気がするんだよね、と言言葉に出して私に話しかける患者さんがいる(主題)。そういう時、私が心がけているのは、患者さんのそういう言葉を否定したり、患者さんから逃げたりしないようにしている。患者さんはその言葉を私から否定されたら孤独になってしまうし(主題に対する理由動機①)、私は患者さんから逃げてしま

ったという後悔の念に苦しむと思う(主題に対する理由動機②)。だから私は患者さんから逃げない(主題に対する目的動機①)ほうが、患者さんにとっても私にとってもお互いのために良いと思うの』

看護師の「主観的な意味の世界」から《肯定的な気づき》を見出してみたが、さらにこの内容を短文にまとめてみると

[患者さんから自分はもうすぐ死ぬのではないのかと告げられた時(主題)、患者さんを孤独にさせたくないから(主題にたいする理由動機①)、私が後悔したくないから(主題に対する理由動機②)私は患者さんから逃げない(主題に対する目的動機①)]という“肯定的な気づき”の大筋を現すことが出来る。

筆者が考える研究論文の結論は以下である。「看護師による《死から逃げる態度》から《死から逃げない態度》への変容には《肯定的な気づき》が関係しており、《肯定的な気づき》は《臨床での経験》,《教育的な働きかけの享受経験》,《ライフヒストリーの経験》によって促されることが明らかとなった。また《肯定的な気づき》を促すには、《臨床での経験》,《教育的な働きかけの享受経験》,《ライフヒストリーの経験》を意識化させ肯定的に意味づけることがターミナルケアに携わる看護師に対する援助となり、同時にターミナルケアの質の向上に貢献すると考えられる。」

ターミナルケアの質の向上という点において、《肯定的な気づき》を看護師に促すことが重要であるならば、レリヴァンス概念により分析した《肯定的な気づき》の具体的な内容を示すことによって、読み手が《肯定的な気づき》というカテゴリーの内実を納得すると言える。

先に示した研究論文の結論だけでは、結論に含まれているであろう、その内容の重みが伝わりにくい。結論には出来事の原因・結果を知らせることと、今後の方向づけの説明が書かれているのみである。データの内部地平を分析することによって初めて当事

者が抱いている《肯定的な気づき》の内容を伝えることが出来るのだと考える。そのことによって結論に明証性を与えることが可能になるのだといえる。

（2）文献の紹介と再解釈 2

次に熟練の訪問看護ステーション管理者が語る〈療養者・家族にとっての当たり前の生活の延長の看取りを支援する〉、その支援の内実を示し、結論の補完をおこなった。

文献は中村順子氏の「熟練の訪問看護ステーション管理者が期待する訪問看護のありよう—人材活用と育成の関わりから—」である（中村 2013:33-42）。

「熟練の訪問看護ステーション管理者が行う訪問看護師を活かし・育てる関わりの中から熟練管理者が期待する訪問看護のありようを明らかにする」ことを研究目的として、一定の条件⁵⁾を満たした訪問看護ステーションの管理者16名の研究参加者に対して、参加観察と半構成インタビューをおこなった。以下の研究結果が得られた。

研究結果

熟練管理者が期待する訪問看護は、大カテゴリーとして【近づき寄り添う看護】が設定され、1.《生活支援医療の専門職であること》すなわち生活を支援する医療専門職としての役割を取ること、2.《オンリーワンの看護ができること》すなわち療養者主体の個別性の高い看護ができることの2つの下位概念により構成されていた（中村 2013:35-39）。

そのうち2.《オンリーワンの看護ができること》というカテゴリーのサブカテゴリーである〈療養者・家族にとっての当たり前の生活の延長の看取りを支援する〉に区分けされた管理者の「語り」を引用する。

「在宅ターミナルでしか学べなかったというのは事実ですね。看護師の役割とか看護の原点かもしれない。私たちのやっていることは基本的な生活のそ

の中を元気なときも病んでいるときも死に向かうときでも大事。トイレに行きたいのなら最後までかなえさせてあげたい。手を握るのも大事だと思うけど家族との時間がそろそろと思うときは看護師として伝えてあげるのがいいのかなと思います（中村 2013:39）。」

上記の管理者の「語り」を筆者が意味解釈をしてレリヴァンスを探り、「主観的な意味の世界」を書き表してみる。二重括弧内に意味解釈を示す。

『在宅での終末期を迎える療養者への看護だからこそ、学べることがあるということは、事実です。それは、看護師の役割とか看護の基本とか言えるようなものです。私たち訪問看護師は、療養者が元気な時も、病んでいる時も、また死に向かっている時（主題1）でも、療養者を支えていくという、療養者にとっての当たり前の生活を持続させる看護（主題1に対する目的動機）をおこなっているのです。だからトイレに行きたいと最後まで望んでおられる場合は、そのように援助します。療養者の気持ちが重く、辛い時（主題2）には、私たちが手を握って傍に居ること、気持ちを解ろうとしていることを示すこと（主題2に対する目的動機）も大切です。そして家族と過ごす時間が少なくなったと私たちが判断した時には（主題3）、家族に伝えてあげる（主題3に対する目的動機）ことがいいのではないかと思います。家族と最期の時を充実した時間として過ごして欲しい（主題3に対する理由動機）のです。』

管理者の「語り」の紹介のみではなく、語りの内部地平である「主観的な意味の世界」を書き表すことで、〈療養者・家族にとっての当たり前の生活の延長の看取りを支援する〉、その支援の内実を示すことが出来、読み手の理解が深まるといえる。

以上の内容を、管理者が言わんとする看護の役割・看護の基本と在宅看護というテーマに焦点化した場合、以下のように書き表すことが出来る。〈 〉内に管理者が考える「看護の基本、看護の役割、そして在宅看護について」を述べる。

〈看護の役割とか看護の基本とは、患者になんらかの「問題1」が立ち上がった時、患者にとっての当たり前の生活を継続させる看護（主題1に対する目的動機）をおこない、患者の気持ちが重くなったり、辛くなったり（主題2）すれば手を握って傍に居ること、気持ちを解ろうとしていることなのです（主題2の目的動機）。このようなこと全てを在宅看護では学ぶことが出来ます。また患者がいよいよ終末期を迎えそうだと判断すれば（主題3）、家族との充実した時間を過ごして頂くために（主題3に対する理由動機）家族にその時期を伝える（主題3に対する目的動機）ことも看護の役割ではないかと思えます。〉

管理者によって意味づけされた「語り」を研究者が解釈した場合、管理者が何を主として語っているのかについて読み替えることも可能だと言える。そして管理者が、病院における看護の現状と在宅における看護の現状の違いをアピールしているとコメントすることも大きな矛盾をきたさない。管理者が意味づけされた「語り」を提示するのみで、このような分析がおこなわれなければ、読み手に納得のいく理解は得られないと考える。

Ⅲ. 考察

本論文において、GTAとレリヴァンス概念を用いての研究手法との対比をおこなってきたが、其々のデータの取り扱い方が大きく異なっていた。その違いの根本理由は「言語」の捉え方である。「言語」が人間社会においてどのような役割を担っているのかについての考察が、質的研究をおこなう上で必須ではないかと考える。しかし現在、人々の語りを素材として研究する質的研究において、その語られた内容そのものをデータとして取り扱う傾向があるように思われる。GTAの場合、解釈学的アプローチを部分的に採用している面もあるが、データそのものを他者がどのように理解したのかという他者へと通じ

る道を閉ざしたままである。その結果として、研究の結論が因果的かつ説明的となり、どうしてそのような事態になったのかという問いに答えられない状況に陥ることが判明した。本論文で述べているが、GTAによる研究論文に、当事者の「主観的な意味の世界」を探りより具体的な知見を述べることによって論文内容がわかりやすく、納得のいく了解を得ることが可能になると考える。〈レリヴァンス概念を用いての研究〉と〈GTA〉、という2つの研究の特徴を生かして補完しあうということである。

補完の仕方として、例えばGTAにおける最も重要な当事者の「語り」やデータを、レリヴァンス概念によって分析してその内実を表すことで研究結果が理解され納得がいくということが考えられる。このように考えると、当事者の「語り」という外部地平としての質的データが存在しなければ、当事者の内部地平を探ることは出来ないわけで、当事者の「語り」を説明する行程と理解する行程の二つの行程を示すことで読み手が納得して了解することが出来るのだといえる。換言すれば、「語り」に用いられているその言葉に従って、語られた内容を説明する行程—語った者が意味づけたままに—という行程と、「語り」を聴いた者がその語りを意味解釈した内容で理解する行程という二つの行程を示すことで読み手は納得し、了解することが出来るのだと考える。

マックス・ウェーバーの理解社会学は、「経験的妥当性」と「明証性」、あるいは、「因果適合性」と「意味適合性」という二元論から成り立っているが、上記の事態は理解社会学の二元論を背景として成立していると言える（吉田 2005:147）。

次にレリヴァンス概念の位置づけを考えてみたい。筆者は看護師の「語り」から当事者の「主観的な意味の世界」を明らかにするためにレリヴァンス概念を用いて分析を行い、当事者も気づきにくいレリヴァンスをみようとしている。そして分析された内容は、説明にとどまるのではなく、読み手が納得出来る、読み手の理解が得られる、いわば当事者と読み

手との間にある眼に見えない〈間主観性〉という役割を担っているといえる。さらに視点を変えていえば、当事者と社会との〈間主観性〉を、レリヴァンス概念を用いての研究手法が、担っているということである。

シュッツがいうように人々の語りは、行為のなかで予め構成されてしまっている、行為者たちによって予め解釈されてしまっているのである。そのことに配慮せずに、データを当事者から離して外在化するだけでは、当事者本来の意思が取り扱われず放置されるという結論に至る。このような点について、今後の質的研究をおこなう際には考えなければならない課題と考える。

注

1) 現象学的還元について—

自分の先入観や思い込みを括弧に入れて、語るその人の世界の「なかに入り込む」というような努力を要する基本的態度を意味する。「その人の立場に立って、その時の感情や考え方を焦点化してみる」と言い換えることが出来る。

2) 内部地平について—

内部地平は知覚経験の次元に現れてくる対象に主として析出するときに開かれてくる。現れるものの内的契機を主題化する分析は、解明的な観察と呼ばれる（木田元他編 2000:324）。

外部地平について—

フッサールは世界を「地平」として捉え、世界は最大限の地平となる。個々の対象はその「外部地平」を持つが、その外部地平が最大限にまで広がればやはり世界になる。いいかえると、個々の対象の「指示」に従っていくと行く着く果てが世界になる（谷 1998:435）。

以上の内容から内部地平は、当事者の主観的な世界を指示し、外部地平は反対に当事者の外部に位置づけられると考える。

3) 間主観性について—

複数の主観が、それぞれ主観のまま（つまり他の主観の1対象としてではなく共通の「われわれ」として）、共同で築きあげる1つの相互関係

である。その関係は、人間どうしの社会関係を基礎づけるだけではなく、事物の客観性の基底をなすものとしてフッサールの現象学において特に重要な役割を負わされていた（木田元他編 2000:74）。

4) 時間意識について

谷は、時間概念について文中に示しているように三つの層に振り分けられるとする。私達が昔のこと、過去のことを思い出す想起・再生によって①表層の時間は得られる。例えば、「昨日、私はAさんに午前中に出て話したなあ〜」というように過去を振り返って思い出し、その場面を再生する時に得られる時間意識である。

想起・再生するとは「なにか」についての想起・再生なのだから「ある別の先行的ななにか」を前提している。それが②中層の時間、「先経験的時間」である。この時間は把持—原印象—予持という意識（志向的体験）の構造に対応する構造（今は過去に支えられ、または過去を手離さず、未来に向かって生きているという“生”の構造）を持っている。「Aさんと話した内容を思い出そうとする私は、思い出さなければ今からの仕事の段取りがつかない。昨日の話をどうして思い出せないのか、その理由は他のことに気持ちが囚われていてしっかり聞いていなかった」ということに、やっと気が付いた、このような時間意識である。

最後の③先時間は、志向性の働きがぎりぎり最低限度になった場面であるが、この時間は、流れつつ立ち止まるという構造をもつ（谷 1998:375-88）。

5) 一定の条件について

参加者は、①現在訪問看護ステーションの管理者であること。②自分自身が訪問看護の経験があること。またその事業所は経営的に安定し、できるだけ離職者が少ないこと。③管理者として同業の管理者や連携している他職種事業所の管理者などから評判が高い熟練した管理者であること。④研究参加に対し文書で同意が得られること（中村 2009:34）。

以上4つの条件をみたした訪問看護ステーションの管理者から研究参加者を選択した。

参考・引用文献

- アルフレッド・シュッツ著 佐藤嘉一訳（2006）『社会的世界の意味構成』木鐸社
- アルフレッド・シュッツ著 那須壽訳（1996）『生活世界の構成 レリヴァンスの現象学』マルジュ社
- B・G・グレイザー A・L・スト劳斯著 後藤隆他訳（2000）『データ対話型理論の発見』新曜社
- ジュリエット・コービン, アンセルム・スト劳斯著 操 華子訳（2012）『質的研究の基礎 グランデッド・セオリー開発の技法と手順』医学書院
- 木下康二（2009）『ライブ講義 M-GTA 実践的質的研究法 修正版グランデッド・セオリーアプローチのすべて』弘文堂
- 木田元他編（2000）『現象学事典』弘文堂
- マックス・ウェーバー著 浜島朗太訳（2005）『現代社会学体系 5 社会学論集ウェーバー』青木書店
- 中村順子（2013）「熟練の訪問看護ステーション管理者が期待する訪問看護のありよう—人材活用と育成の関わりから—」『日本看護科学会誌』第33巻 4号, 35-42頁
- 大西奈保子（2009）「ターミナルケアに関わる看護師の“肯定的な気づき”と態度変容過程」『日本看護科学会誌』第29巻 3号, 43-42頁
- 佐藤嘉一（2008）「シュッツの言語理論と自己論的アプローチ—物語のなかの社会とアイデンティティ再考—」『立命館産業社会論集』44巻 2号, 1-12頁
- 谷 徹（1998）『意識の自然』勁草書房
- W. キャロル チェニッツ・ジャンス M. スワンソン編 樋口康子他訳（1992）『グランデッド・セオリー看護の質的研究のために』医学書院
- W.M. スブロンデル編 佐藤嘉一訳（1980）『シュッツ・パーソンズ 往復書簡 社会理論の構成』木鐸社
- 三木佳子（2010）「ストーマをもつ既婚女性の日常生活における困難の捉え方・処方」『日本看護科学会誌』30巻, 1号, 42-51頁
- 山口末久（2013）「地域に住む青年期進行性筋ジストロフィー患者の自立プロセスの記述的理解」『日本看護科学会誌』33巻, 2号, 62-69頁
- 吉田浩（2005）『ウェーバーとヘーゲル, マルクス』文理閣
- 山中恵利子（2011）「看護行為の体験と臨床の知—シュッツのレリヴァンス概念を用いた2人の看護師が語る看護行為の体験談の分析—」『人と環境』4号, 1-8頁
- 山中恵利子（2012）「看護行為の体験と臨床の知（類型化）—シュッツのレリヴァンス概念を用いた看護師が語る看護行為の体験談の分析 第2報」『大阪信愛女学院短期大学紀要』46号, 1-7頁
- 梁 誠崇 「グランデッド・セオリーと現象学的記述の位相についての一考察」『大阪大学教育学年報』第12巻, 27-40頁.
- 山本奈生（2007）「社会問題の構築主義とグランデッド・セオリー」『佛教大学大学院紀要』35号, 161-174頁

A Methodological Study on the Application of Alfred Schutz's Theory
of Relevance in Nursing Research :
A Comparison with Granted Theory Approach (GTA)

YAMANAKA Erikoⁱ

Abstract : This study aims to examine whether a research method using Alfred Schutz's theory of relevance is the optimal approach to analyze clinical experiences of nurses. To this end, major features of a research method based on Schutz's theory of relevance were weighed against those of the grounded theory approach (GTA), the most commonly used method for analyzing clinical nursing experiences. A comparison was made of how to deal with data between the relevance-theory approach and the GTA. As a result, it was found that the relevance-theory approach focuses on understanding the study subjects by exploring their realm of inner horizon, or their subjective meanings (theme, motive, interpretation, etc.), using data, and that the GTA places importance on the objective explanation of the subjects by regarding data as external data (events), or the realm of outer horizon (objective meanings). In short, the two approaches represent 'two sides of the same coin.' Therefore, it is argued that data analysis using the relevance-theory approach is necessary to make GTA-based research results more convincing and evident. It can also be concluded that the relevance-theory approach which focuses on understanding of the subjects (nurses) by exploring the "realms of subjective meaning" is the optimal method for analyzing clinical nursing experiences.

Keywords : relevance theory, Granted Theory Approach (GTA), Schutz's linguistic theory, inner horizon and outer horizon

ⁱ Doctoral Program, Graduate School of Sociology, Ritsumeikan University